

## B 比爪館跡と周辺の文化財

### 箱清水石卒都婆群

#### B⑩ 板碑とは

板碑は、板状の形状で、石で造られた中世の石塔（仏塔）である。塔や塔婆<sup>とうぼ</sup>という言葉は、仏塔を意味する「ストウーパ」が語源とされる。この音を漢字で表した卒塔婆（卒都婆）の略であり、本来、釈迦の骨とされる仏舎利<sup>ぶつしゃり</sup>を安置するための建造物であるとされる。

卒塔婆（卒都婆）を板碑と呼ぶようになったのは、江戸時代後半であるとされる。板碑は、板状の石碑という形状から名付けられたとされるが、板碑は記念碑のような石碑ではなく、仏塔である。石塔は、中世以降、五輪塔・板碑・宝篋印塔<sup>ほうきょういんとう</sup>・多宝塔などの種類があるが、板碑は五輪塔を基本としており、石塔のなかで最も多い塔形である。

板碑は、鎌倉武士の本貫地<sup>ほんがんち</sup>（本籍地）である関東地方に広く分布している。これは、武蔵や相模などの御家人を中心とする東国の武士が石塔を造立したと考えられており、当時の東国武士の信仰のあり方の一端を示している。常に死と直面していた武士は、死に対する不安、自己の生存のために人を殺傷しなければならないという罪の意識などが、当時広まりつつある浄土教の思想と結び付き、武士の間で盛んに板碑が造立されたと考えられている。

板碑は、南北朝時代・室町時代に最盛期を迎えたとされる。板碑の造立者は、全国的な傾向から有力寺院の高僧、有力名主層以上の限られた少数の階層が多いとされるが、中世後期には農民層によっても造立された。板碑が所在する場所は、村びとの結合を背景に村の信仰の核である鎮守境内や仏堂に接した場所や地域の中心地またはそれに近い範囲であることも全国的な傾向とされている。

板碑の一般的な形状は、板状に加工した石材の頭部を三角形にして、その東部の下に二条線と呼ばれる2本の溝状の線を刻み、その下に種子<sup>しゅじ</sup>を刻む。その下に紀年銘、供養者、被供養者、願文、偈頌<sup>げじゆ</sup>などが彫られる場合が多い。

板碑は供養の内容から、追善供養塔（順修供養塔）と逆修作善塔に分けられる。追善供養塔は死者の供養のために造られたものである。逆修作善塔は、建立者が生前の善行によって功德を積み、生きている間に自分やその家族の死後の安楽を願って造られる。

板碑は、供養塔だけではなく、墓塔として使われたと考えられている。盛岡藩の地誌である「旧跡遺聞」（『南部叢書』第7冊）では、「箱清水板碑群」は、樋爪五郎季衡の墓として伝えられていたことが知られる。